

保健の授業で

一人一台端末を使用する場合の構想

調布市立第三小学校
指導教諭
小島 大樹



一人一台端末をいろいろな授業で使ってみたいけれど、保健の授業で使うイメージが湧かない…とお困りの先生方もいらっしゃるのではないのでしょうか？

調布市立第三小学校指導教諭の小島先生に、保健の授業では一人一台端末をどのように使えるのか、アイデアを教えてくださいました。

一人一台端末の落とし穴

一人一台端末が配布され、多くの学校で運用が始まっており、試行錯誤の日々が続いていると思われます。本校でも、一人一台端末をどのように利活用していくのか、教職員と話し合ったり、子どもたちと一緒に授業の中で考えたりしている最中です。先進校からのさまざまな報告も、有効な示唆を与えてくれます。

そんな中で、仲間たちと話していると「タブレットを使うことで子どもたちの意欲が高まった」という話を聞くことがあります。子どもたちが一人一台端末を使っている姿を見ると、確かに黙々と取り組む様子が見られます。しかし、ここにこそ、落とし穴があるのではないかと思います。子どもたちが意欲的に取り組んでいるのは、「タブレットがおもしろい」からになっていないのでしょうか。本来、「学ぶこと自体がおもしろい」から、意欲的にならないといけないのではないのでしょうか。僕たち教師はここを見極める必要があるように思います。「楽しく学習させる」のではなく、「学習する内容がおもしろい」ようにしていくことが重要なのではないかと思います。そのためにも、一人一台端末の利活用の仕方を考える前に、今一度「学習する内容のおもしろさや魅力」を考え直したうえで、授業設計をしていく必要があると思います。

保健の学びと一人一台端末の関係

学習指導要領の改訂の最も重要なポイントは、「健康課題を解決する力」の育成であると言われています(森、2019(※1))。そのためにも、子どもたちが学習内容を自分事として捉えられるようにすることが重要であると考えられます。つまり、自分事だからこそ解決したくなるのであり、それこそがおもしろいのです。それならば、一人一台端末は、学習内容を自分事にさせるために、そして学習で見つけた課題を解決できるようにするために、利

活用されるべきものではないのでしょうか。

(※1) 森良一(2019)「健康そのものが問い直される時代の保健科教育の行方」『体育科教育』第67巻第8号 大修館書店

今まで行ってきた授業に一人一台端末を使えるか考える

以上のことを踏まえたとうえで、一人一台端末を保健の授業の中でどのように使えばよいのでしょうか。まずは今まで行っていた授業に工夫すればよいのではないかと考えます。いきなり、先進校が行っているようなすごい授業をする必要はないと思います。できることから無理なく始めるべきです。僕ら教師が無理なく使えるようにしていくことが、一人一台端末の使用を継続する秘訣でしょう。

僕自身まだ一人一台端末を使って保健学習を展開したわけではありません。そこで、今年度5年生の担任である僕が「こんなことをやってみようかな?」と考えている案をご紹介します。

その1 二次元コードの有効活用

現行の教科書には、二次元コードがついています。これを教師だけが使うなんて本当にもったいないことです。子どもも自由に使えるようにしてはどうでしょうか。僕は、「問いづくり」を終えた後に、子どもたちが自分で課題を解決する時間を設定しようと思っています。子どもたちが自由に二次元コードを読み取れるようにすれば、自分で課題を解決していけるようになるのではないのでしょうか。



▲教科書の二次元コードを読み取ると、学習内容に関連した動画が再生される。

その2 5年「けがの防止」でカメラ機能を活用

5年「けがの防止」では、けがの原因には「人の行動」と「環境」が関わり合っていることを学習します。僕は、これまでこの2つを学習した後に「校内でけがが起こりそうな環境の写真を撮っておいで」と言って、デジタルカメラを渡していました。

そのときに困っていたのが、撮影した当日の写真共有が難しいことです。デジタルカメラで写真を撮ってきても、一台一台のデータを取り込むことは授業時間内にできませんでした。しかし、一人一台端末であれば、撮ってきた写真をその場で共有することができます。本校では、ミライシード(※2)の中のオクリンクというソフトを使えば、全員が友達の写真をすぐに見られるようになります。ミライシードに限らず、ほかのデジタル教材ソフトでも、同様のことが可能な場合が多いでしょう。

(※2) 株式会社ベネッセコーポレーションのタブレット学習ソフト



▲授業で撮影した写真を、その日のうちにクラスで共有できる。

撮影当日であれば、自分事としての関心も高いままで、不思議なもので、子どもたちは興味さえあれば、こちらが何も言わなくても友達の写真を見ます。そこから対話生まれるのです。「こんな場所撮ってきたよ」「たしかにそこは滑りやすい環境だね」なんて言葉が聞かえたらしめたものです!

まとめ

先にも述べましたが、教師ができることから始めていくとよいと思います。そして、これを使えば学びが深まると思ったら、迷わずに取り組むべきでしょう。初めてのことで、失敗して当たり前です。失敗したら、改善していけばよいのです。僕自身も試行錯誤しながら実践を積み重ねていこうと思っています。

その3 5年「心の健康」でJamboardを活用

佐伯((1995)(※3))は、「人は、学びがいを求めて、学ぶ」のであり、「学べないことは、学べない」のだと主張します。ですから、教師が「これは大切だから…」と言ったところで、子どもたちにとって学びがいがなければ、「からだがいこうことをきかない」ということになってしまいます。そう考えると、導入はとても大切な時間と言えます。単元の導入で、子どもたちに「学びたい」と思ってもらえるかどうかはその単元での学習の成否を決めると言えるでしょう。

そこで僕は、「心の健康」単元の導入で、Jamboardを使って「問いづくり」をしたいと考えています。例えば、担任の4~5歳の頃の写真と、5年生の頃の写真を提示し、「体や見た目以外に変わったことは何だと思いますか」と発問をします。そして、子どもたちに、変わったと思うところを付箋で貼ってもらいます。それらに共通することとして、心が変容したことを共有することで、「心は本当に成長するのか」「心はどのように成長していくのか」などの問いを立てていけるのではないかと思います。



◀単元の導入の問いに対する答えをJamboardで集めることができる。

また、Jamboardでなくても、クラス全体としてMentimeterなどを使って、変わったと思うことを入力させることもできるでしょう。Mentimeterには、子どもたちが入力したことが分類されて表示されます。この中に、心に関係するような内容が出てくればしめたものです。教師から「体が成長するのは、4年生のときに学習したからそうだろうけど、心も本当に成長するの?」と揺さぶりをかけ、その後「問いづくり」をすれば、「学びがい」のあるものになっていくのではないのでしょうか。

(※3) 佐伯胖(1995)『「学ぶ」ということの意味 子どもと教育』岩波書店